

# 高津池北古墳

1982年3月



A21182038817A  
岡山大学附属図書館

岡山県真備町総合公園内  
埋蔵文化財発掘調査委員会

L217.5  
T  
解説

1. 6 /

## 序

岡山県の南西部に位置します真備町は豊かな自然に恵まれ、筍の産地としても有名な所であります。近年は水島や倉敷方面に近いことから、急速に人口も増加しており活気あふれる町となっております。

また歴史的に見ましても古くから開けており、県下三大巨石墳の一つであります箭田大塚古墳をはじめ多くの遺跡が分布しています。

このため町の総合公園建設にあたりましてもできるかぎり文化財の無い場所を選定したわけですが、未発見の古墳が工事中に発見されました。

さっそく県教育庁文化課の指導を仰ぎながら関係部局と協議を重ねましたが、設計変更が困難であることからやむなく発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査の結果、高津池北古墳は全長5mの横穴式石室を内部主体とする径約10mの円墳で、7世紀の初頭に築造されたものであることが判明しました。

本書はこうした調査の成果をまとめたものであります。今後の文化財の保護・保存に活用され、また考古学研究の資料として役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、岡山県教育委員会、真備町、真備町教育委員会、真備町文化財保護委員等関係各位から多くの協力と助言をいただきました。また猛暑にもかかわらず地元の方々には発掘作業に従事していただきました。あわせて厚く御礼申しあげます。

昭和57年3月

真備町総合公園内埋蔵文化財

発掘調査委員会委員長

真備町教育委員会

教育長 服 部 育



## 例　　言

1. 本書は真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査委員会が真備町より委託を受けて実施した「高津池北古墳」の発掘調査報告である。
2. 古墳は岡山県吉備郡真備町大字箭田字高津池北2253番地に所在する。
3. 発掘調査は、平井　勝（県教育庁文化課）が担当し、昭和56年（1981年）7月22日から9月1日まで実施した。
4. 出土遺物の整理と報告書の作成は、県教育庁文化課分室にて、下記の方々の協力を得て平井が行なった。  
　　亀田菜穂子（文化課分室）、清水恵子（文化課分室）、網本善光（筑波大学）、武田恭彰（中央大学）、長谷川一英（奈良大学）
5. 本書の執筆、編集は平井が行なった。  
　　なお付載の一部は武田恭彰が執筆した。
6. 凡例
  - a. 第2図と第12図の地形図は国土地理院発行の25,000分の1の地図（箭田）を複製したものである。
  - b. レベルは海拔高度を示す。
  - c. 方位は第1図、第2図、第12図、第13図以外はすべて磁北を示す。

## 目 次

序	
例 言	
第Ⅰ章 調査の経緯	1
第Ⅱ章 古墳の位置と歴史的景観	4
I 位置	4
II 歴史的景観	6
第Ⅲ章 調査の経過	7
第Ⅳ章 古墳	9
I 墳丘	9
II 周溝	9
III 横穴式石室	10
IV 遺物の出土状態	14
V 出土遺物	14
第Ⅴ章 結語	19
付 載 真備町出土の遺物	20
I 吉備寺出土の瓦	20
II 妹出土の装飾付須恵器	23

## 表 目 次

表 1 須恵器・土師器計測表	17
----------------	----

## 図 目 次

第 1 図 古墳の位置	4
第 2 図 遺跡分布図 ( $S = \frac{1}{25,000}$ )	5

第3図	墳丘測量図	10
第4図	古墳平面図	11
第5図	横穴式石室実測図	12
第6図	古墳の縦横断面図	13
第7図	遺物分布図	14
第8図	須恵器(1)	15
第9図	須恵器(2)	16
第10図	土師器	16
第11図	鉄釘	18
第12図	遺跡の位置 ( $S = \frac{1}{25,000}$ )	20
第13図	瓦の出土位置	21
第14図	吉備寺出土の瓦	22
第15図	妹字内山出土の須恵器	24

## 図版目次

- 図版 1 1 古墳の遠景（南西から）  
           2 古墳の近景（南から）
- 図版 2 1 調査前の古墳（北から）  
           2 調査前の古墳（西から）
- 図版 3 1 調査風景（西から）  
           2 調査風景（南西から）
- 図版 4 1 調査風景（南から）  
           2 調査風景（南から）
- 図版 5 1 古墳全景（南から）  
           2 古墳全景（北から）
- 図版 6 1 石室内副葬品出土状態（南から）  
           2 石室内奥壁北西部の副葬品出土状態（南から）
- 図版 7 1 横穴式石室（南から）  
           2 横穴式石室（西から）
- 図版 8 1 北西端の石室掘方（西から）

- 2 墓壁部石室掘方と土層断面（西から）
- 図版9 1 Wトレントチの石室掘方（西から）  
2 Wトレントチ石室掘方の土層断面（南から）
- 図版10 1 Eトレントチの石室掘方と土層断面（東南から）  
2 Eトレントチ石室掘方の土層断面（南から）
- 図版11 1 ESトレントチ土層断面（南から）  
2 WSトレントチ土層断面（南から）
- 図版12 1 Nトレントチ土層断面（西から）  
2 周溝（東から）
- 図版13 1 周溝内のピット（北東から）  
2 石室前面の凹部（北から）
- 図版14 1 調査後の古墳全景（南から）  
2 調査後の古墳全景（北から）
- 図版15 1 調査後の古墳遠景（南から）  
2 見学会の風景
- 図版16 須恵器（1）
- 図版17 1 須恵器（2）  
2 土師器
- 図版18 1 鉄釘  
2 吉備寺出土の軒丸瓦

## 第Ⅰ章 調査の経緯

真備町はスポーツ施設などを含めた総合公園の建設を計画した。用地は町のはば中央、箭田字高津池地内で、丘陵を削平し前面の高津池を一部埋め立てる計画である。

昭和55年10月から一部造成工事を開始したが、高津池の北東側丘陵斜面で古墳が発見された。町教育委員会からの連絡で県教育庁文化課の専門職員が現地に出向き、横穴式石室であることを確認するとともに、とりあえず現状で保存しておくことと、遺跡発見通知（文化財保護法第57条の6）を提出するよう指示した。

昭和55年11月14日付けで真備町町長土師雄一からの遺跡発見通知が町教育委員会から県教育委員会に送達された。これを受け三者で保護保存の協議を重ねたが、古墳の所在する位置が体育館建設予定地であり、設計変更も困難であることから、やむなく発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は下記のような調査委員会組織で実施することで合意し、昭和56年7月22日から9月1日まで実施した。

調査にあたっては岡山県教育委員会、真備町、真備町教育委員会、真備町文化財保護委員会等関係各位から多大な援助を得た。また発掘作業には猛暑にもかかわらず地元の方々から協力を得た。

### 真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査委員会会則

#### （設置）

第1条 真備町大字箭田字高津池北地内の真備町総合公園造成工事に伴なう埋蔵文化財の発掘調査を実施するため真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査委員会（以下「委員会」という）を設置する。

#### （目的）

第2条 委員会は真備町大字箭田字高津池北地内における真備町総合公園造成工事に伴い同用地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施し記録保存措置等を行うことを目的とする。

#### （事業）

第3条 委員会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 高津池北古墳の発掘調査並びに保存に関すること。
- (2) その他目的を達成するために必要な事業。

#### （組織）

第4条 委員会の委員長は真備町教育委員会教育長、副委員長は岡山県教育委員会文化課課長

代理をもって充て、委員は真備町文化財保護委員及び関係行政機関の職員のうちから委員長が委嘱する。

- 2 委員会は発掘調査を専門的に実施するために調査員をおき、その調査員は委員長が委嘱する。

発掘調査の専門的事項については岡山県文化財保護審議会委員及び関係者の指導をうけるものとする。

- 3 委員長は委員会を代表し会務を掌握する。

- 4 副委員長は委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名する副委員長がその職務を代理する。

(任期)

第5条 委員長、副委員長及び委員の任期は調査が完了するまでとする。

ただし、それぞれの機関の役職に存する期間に限るものとする。

(会議)

第6条 委員会は委員長が招集する。

- 2 委員会は次の事項について審議する。

- (1)会則の制定および改廃に関すること。  
(2)調査の基本方針に関すること。  
(3)その他重要事項。

(事務局)

第7条 委員会は事務を処理するため真備町教育委員会に事務所を置く。

- 2 事務局長は真備町教育委員会社会教育課長をもって充て、その他の事務職員は委員長が委嘱する。

(監査)

第8条 会計監査を実施するため、委員会に監事を置き真備町役場総務部長及び真備町教育委員会総務課長をもって充てる。

第9条 この会則に定めるもののほか、委員会の運営に関して必要な事項は委員会が定める。

この会則は昭和56年7月16日から施行する。

真備町総合公園造成工事に伴なう埋蔵文化財発掘調査実施要項

1. 調査名 真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査  
2. 場 所 岡山県吉備郡真備町大字箭田字高津池北  
3. 調査の目的及び概要

- 1) 目 的 真備町総合公園造成工事に先立ち用地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査

を実施し、記録保存及び所要の措置を講ずるものとする。

- 2) 概 要 高津池北古墳の全面発掘調査を実施し、記録保存措置を講ずる。  
必要に応じ第2次調査を協議の上実施する。

4. 調査の実施 調査の実施は調査委員会を設置し実施する。

- 1) 名 称 真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査委員会  
2) 構 成 委員長、副委員長、委員、監事  
3) 実施期間 昭和56年7月20日～9月15日  
4) その 他 調査の万全を期するために県文化財保護審議委員の指導助言をうける。

5. 調査経費 152万円

6. 調査結果の報告 調査終了後文化財調査実施報告を提出する。

7. 調査報告書 埋蔵文化財発掘調査報告を刊行する。

真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査委員会

役 名	氏 名	所 属
委 員 長	服 部 穎	真備町教育委員会教育長
副 委 員 長	吉 光 一 修	県教育庁文化課課長代理
委 員	河 本 清	県教育庁文化課埋蔵文化財係長
◆(調査員)	平 井 勝	県教育庁文化課文化財保護主事
◆	川 上 道 正	真備町役場総務部企画広報課長
◆	浅 野 嘉 一	真備町文化財保護委員長
◆	須 増 正	真備町文化財保護委員
◆	難 波 安 正	真備町教育委員会社会教育課長
監 事	加 藤 昭 二	真備町役場総務部長
◆	岡 本 義 男	真備町教育委員会総務課長
事 務 局 長	難 波 安 正	真備町教育委員会社会教育課長
局 員	石 川 宏	真備町教育委員会社会教育主事
◆	岡 本 久	◆
◆	片 岡 展 弘	真備町教育委員会主事
◆	浅 野 仁 子	真備町公民館主事

調査参加者 綱本善光(筑波大学)、武田恭彰(中央大学)、長谷川一英(奈良大学)

作業員 片岡敬子、片岡操、片岡栄、妹尾鏡子

## 第Ⅱ章 古墳の位置と歴史的景観

### I 位 置



第1図 古墳の位置

古墳は岡山県の南西部、吉備郡真備町大字箭田字高津池北に所在する。

古墳の所在する真備町は、高梁川支流の小田川下流に位置し、東は高梁川を境に清音村と、北東から北は総社市と、西は矢掛町、南は倉敷市、船穂町と接している。

町は巨視的に見れば、東西8.7km、南北7.7kmの略長方形を呈している。その中南部を東西に小田川が流れ、北部には標高300m前後の丘陵が東西に連なり、その北は吉備高原に続いている。南部にも東西に丘陵が連なるが、斜面は急峻である。しか

しその南側は緩やかな斜面となり、倉敷市玉島の平野に続く。

これら平地を囲む丘陵は、全体としては吉備高原最南端としての性格をもち、山頂は隆起準平原の面を残しているため、なだらかな高原状を呈している。

ここで少し詳細に地形を見てみる。町の中南部を東西に貫流する小田川は、その両岸に沖積地を形成し、東に行くほど大きく広がる。特に高梁川に注ぐ川辺には拡大した沖積地が広がっている。また有井から市場には小田川の支流末政川が北西から南東に流れ、その両岸に狭いながらも沖積地を形成し、町の中央部にあたる箭田にもほぼ南北に平地が形成されている。

かかる平地をとりまく丘陵はほとんどが低丘陵で、標高200m以上の丘陵は町全体面積の10%程度である。残り90%は標高200m以下の丘陵であり、このうち40%（平地も含めて）が50m以下という構成比をとる。特に箭田には100m以下の低丘陵が広がり、第三紀層であるなど、箭の良好な立地条件となっている。

さて古墳の位置する箭田の平地は南北に細長く、北部には大きな溜池が二ヶ所認められる。この平地の最奥部にあるのが高津池であり、古墳はその北東の丘陵斜面に所在する。高津池は南側の中の池とともに江戸時代初期に築造されたもので、その貯水量の多さと受益面積の多さ



- |           |            |             |               |
|-----------|------------|-------------|---------------|
| 1. 高津池北古墳 | 7. 高馬古墳    | 13. 黒富大塚    | 19. 竜王塚有井 1号墳 |
| 2. 下田口古墳  | 8. 矢砂大池古墳群 | 14. 松尾古墳    | 20. 有井古墳群     |
| 3. 真神古墳群  | 9. 向坂古墳群   | 15. 大谷大塚古墳群 | 21. 宮造田遺跡     |
| 4. 高津池古墳群 | 10. 土地衝古墳群 | 16. 外和崎古墳   | 22. 田中古墳群     |
| 5. 皿池古墳群  | 11. 半田遺跡   | 17. 剣塚古墳    | 23. 田中塚古墳     |
| 6. 莠田大塚古墳 | 12. 濱戸古墳群  | 18. 西山古墳群   | 24. 山之谷古墳群    |
| 25. 寺古墳   | 26. 正蓮寺古墳群 |             |               |

第2図 遺跡分布図 ( $S = \frac{1}{25,000}$ )

は町内でも 1, 2 のものである。

## II 歴史的景観

真備町における古墳の分布を見るとき、大きくは三地域に区分することができる。一つは小田川の下流南側、高梁川との合流地点にほど近い下二万から南山にかけての地域であり、二つめは町の北東部、末政川流域から新本川が高梁川に合流する地点にほど近い辻田の地域、三つめは小田川の北岸、箭田を中心に尾崎、妹の地域である。

かかる三地域における古墳の分布は一様ではなく、それぞれの地域における歴史的性格を反影している。また当然ではあるが、これらの地域の古墳には一小地域ではなく、小地域をこえた結合体を想定しなければ理解し得ない大型古墳も所在する。

こうした小地域をこえた集団による築造と考えられる大型古墳は、小田川下流、南山の天狗山古墳、同じく下二万の二万大塚古墳、小田川北岸の箭田大塚がある。とりわけ箭田大塚古墳の横穴式石室は全長19.1mと、県下三大巨石墳の一つであり、高梁川以西を本貫地とする首長の築造によるものと考えられる。

この箭田大塚古墳が所在する箭田の平地は条里制遺構がよく残存しており、この地域が古代において中心的な所であったことがうかがわれる。しかし古墳に限ってみれば、箭田大塚古墳以外大きな古墳もなく、また築造数も少ない。僅かに北部に皿池古墳群と高津池古墳群が所在するにすぎない。

高津池北古墳の南側に位置する皿池古墳群は5基からなる古墳群で、横穴式石室を内部主体とする古墳である。また高津北の西側に所在する高津池古墳群は13基からなる古墳群で、不明のものもあるが、その多くは横穴式石室を内部主体とするものである。したがって箭田の平地最奥部に位置するこれらの古墳は多くが後期古墳と考えられる。

前期古墳は箭田の平野南部東側の丘陵上に西山古墳群（註1）が所在する。墳地造成に伴なって調査され、特殊器台の転用棺や前期古墳と考えられる円墳2基を検出している。

### 註

註1 正岡睦夫、山崎康平、平井勝「西山遺跡」岡山県真備町教育委員会 1979年

### 第Ⅲ章 調査の経過

古墳は丘陵斜面の裾部に所在する。一帯は竹の子の産地として知られており、古墳の所在する斜面も竹藪である。このため、旧地形の変容は著じるしく、古墳もまた同様である。

現状では古墳の墳丘は僅かに認められるが、西側は大きく抉られている。南側には側壁と考えられる石と、その上に落下した天井石が一枚認められ、明らかに横穴式石室を内部主体とする古墳であることが窺われた。

調査はまず竹や雑草の伐採と、それと平行して墳丘、および地形の測量を実施した。

古墳上には現状でほぼ古墳の中心と考えられる所に基準杭(0)を置き、ここから大略東西南北に基準線を設定した。この基準線に沿って東、西、北の各トレンチを設定し掘り下げた。その結果東トレンチでは石室掘方と、その外側に周溝が検出され、西トレンチでは石室掘方が、北トレンチでは石室掘方と周溝が確認できた。

各トレンチの知見に基づき古墳の北側に残る周溝の検出に勉めるとともに石室内の排水作業も合せて行った。石室内の埋土は石室床面より20cm上までが砂質の流入土であるが、これ以下は硬くしまった暗褐色砂質土であった。

周溝の検出が完了した後、石室内副葬品の検出及び石室入口前面の調査を行った。

石室の実測については、当初設定した基準線が石室主軸と合わないことから、0はそのまま、東西南北の基準線の角度を変更した。最後に全体の測量を行いすべての調査を終了した。なお調査中見学会を実施し、約250名もの多くの参加者があった。

#### 日誌抄

1981年(昭和56年)7月22日(水) 調査開始。テントの設営及び草刈り作業を行う。

23日(木) 草刈り、墳丘測量( $S = 1/50$ )を行う。

24日(金) 草刈り完了。全景写真撮影。石室西半部の天井石検出作業。

27日(月) 石室西半部天井石検出作業。

28日(火) N・Eトレンチを設定し掘り下げる。

29日(水) N・Eトレンチ掘り下げ。落下した天井石の除去(クレーン車使用)。

30日(木) N・Eトレンチ掘り下げ。石室内流入土の排水作業。

31日(金) N・Eトレンチ掘り下げ。石室周辺の表土除去作業を行う。

8月3日(月) N・Eトレンチ掘り下げ。石室周辺の表土除去作業を行う。

4日(火) N・Eトレンチ掘り下げ完了。石室西側表土削ぎ。

- 5日(水) 北側の周溝検出作業。
- 10日(月) 北側の周溝検出作業。
- 11日(火) 北側の周溝検出作業。
- 12日(水) 北側の周溝検出作業。Nトレーナー断面実測。
- 17日(月) 北側から東側の周溝掘り下げ。石室内流入土の排土。
- 18日(火) 周溝掘り下げ完了。周溝底部より柱穴が二ヶ所検出される。
- 19日(水) 周溝掘り下げ完了後の写真撮影。石室内掘り下げ作業を行う。
- 20日(木) 石室北西側の掘方検出。石室内副葬品検出作業。
- 21日(金) Wトレーナーを設定後掘り下げを行う。石室内副葬品検出作業。
- 22日(土) 石室内副葬品検出作業。W-Sトレーナー設定後掘り下げを行う。
- 23日(日) 見学会。約250名の参加者があった。
- 24日(月) 石室内副葬品検出完了。副葬品分布図作成、Wトレーナー断面実測を行う。W-Sトレーナー掘り下げ。副葬品取り上げ。
- 25日(火) W-Sトレーナー掘り下げ完了。石室内遺物取り上げ。石室の割付後側壁から実測(S=1/10)を開始する。Eトレーナーで掘方検出。
- 26日(水) Eトレーナー掘方掘り下げ完了。石室側壁、奥壁実測完了。石室平面実測。E、W-Sトレーナー断面実測。吉備郡内の小・中学校教員見学。
- 27日(木) E-Sトレーナー設定後掘り下げを行う。石室平面、縦横断面実測。
- 28日(金) E-Sトレーナー掘り下げ完了。石室入口前面の掘り下げ。石室平面、縦横断面実測完了。Eトレーナー断面実測。
- 31日(月) 古墳全体測量(S=1/40)
- 9月1日(火) 全景写真撮影、器材の整理を行い調査を終了する。

## 第IV章 古 墳

### I 墳丘

墳丘は筍の栽培によって削平、あるいは抉られており現状では旧状を窺い知れないが、調査の結果墳丘を画する周溝が検出され、その大略を推定する手掛かりが得られた。

墳丘規模は、墳端を周溝底部中心とすると東西は石室中心から東が5.8mあり、これを反転した11.6mが概ねの数値である。南北については、北側は周溝があり問題はないが、南側は推定困難である。一応石室内からの排水溝が消滅する付近に求めると、概ね10mが得られる。

墳丘の高さについては美壁に接して天井石が残存しており、これを覆う程度の墳丘を推定すれば、北側では周溝底部との比高差約1.4m、南側では約4mを測る。

さて得られた数値は厳密ではないが、一応の目安にはなり得る。10~11m前後の墳丘を有する古墳はこの地域ではごく普通の規模である。

墳丘の盛土は地山（黄褐色の風化花崗岩）上に一定の厚さで側壁を乗せながら積みあげていた状態が看取される。

### II 周溝

周溝は墳丘の北側と東側で検出されたが、西側は斜面が大きく抉られているため破壊されたものと考えられる。また南側については、石室入口から東西に設定したトレンチにおいても検出されなかった。このことから周溝が削平されたものか、あるいは本来掘られていなかったものかは決し難いが、あまり削平された場所でないだけにもし周溝が掘られていれば、よほど浅いものでないかぎり残っているものと思われる。したがって本来掘られていなかった可能性が強いものと推定される。

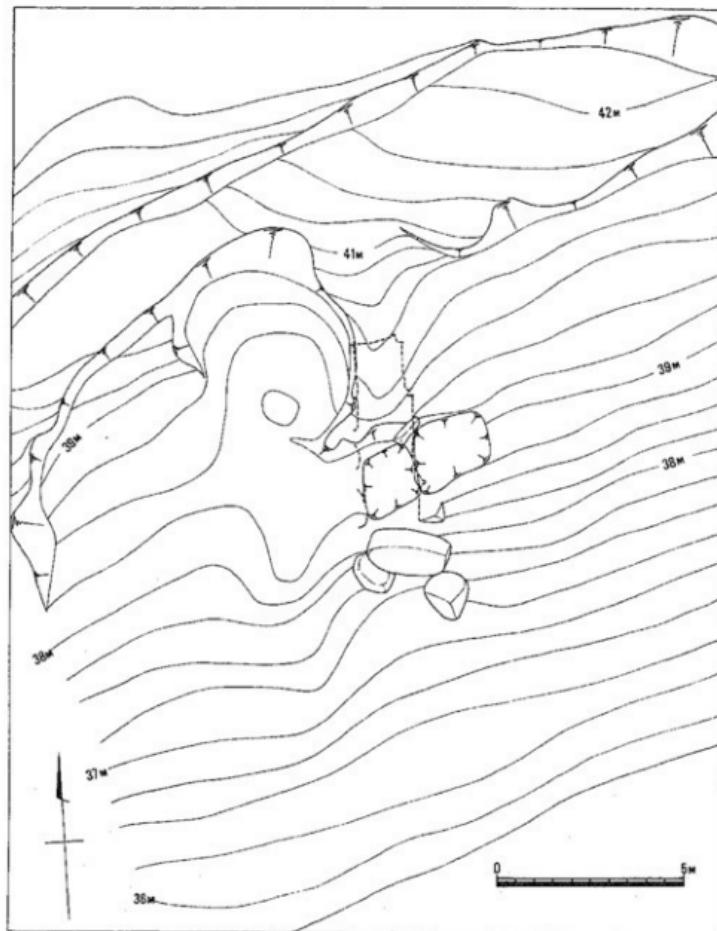
さて周溝は古墳の北側、丘陵斜面の高い側を大規模に削って整えており、その幅は4mを測る。周溝の壁立上りは北側が地山であるのに対し、南側は盛土で墳丘も兼ねている。東側は地山を掘り下げており、現存部上面での幅は2.4mを測る。

周溝内の最下層には暗黄褐色土が堆積しており、その中より若干の須恵器壺の小破片が出土した。

なお周溝内には柱穴状のピットが2ヶ所認められた。いずれも径20cmであり、埋土は周溝底部に堆積した土であることから、古墳に伴うものと考えて間違いない。

### III 横穴式石室

古墳のほぼ中央には南に開口する無袖の横穴式石室が築かれている。現存部の全長5m、中央部幅1.47m、高さ1.55mを測る。



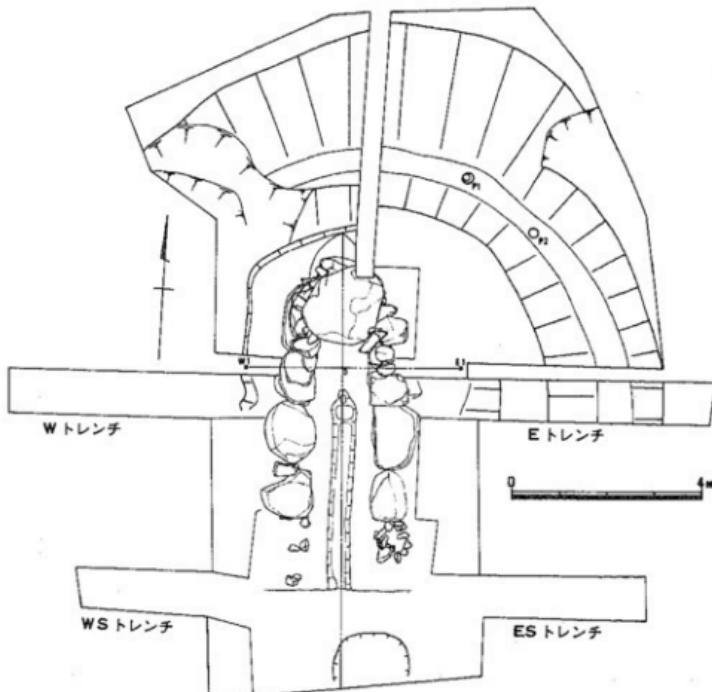
第3図 墓丘測量図

石室掘方は石室よりやや広めで、地山を長方形に掘り下げており、その中に石室を築造している。側壁の石は最下段が広口積、2・3段目は横口、あるいは外口積みとなっている。東側壁の入口の石は立てて使用しており他の使い方と様相を異にする。あるいは袖石の退化したものとも考えられる。

現存する側壁の南には礫が置かれており、この上にも側壁があったものと考えられる。おそらくレッカーカー車で取り除いた石がこの上にあったものであろう。

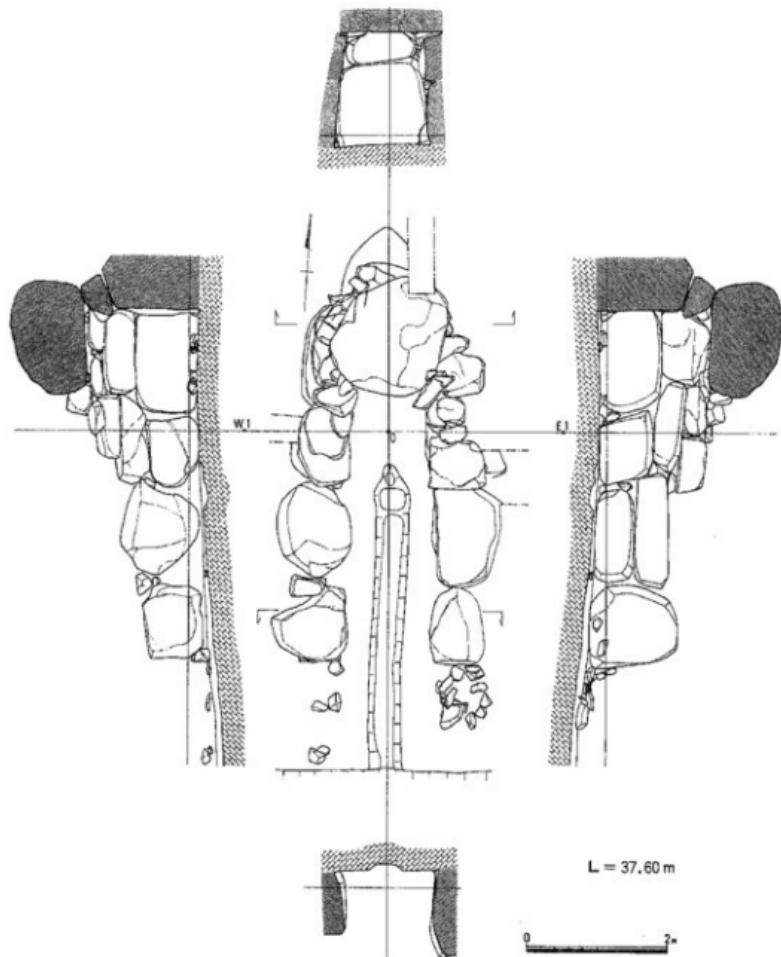
天井石は入口前に一枚転落していたが、原位置を保つものは奥壁に接している一枚だけである。

床面は地山をそのまま利用しているが、入口にむかって少しづつ下がってゆく。また床面には主軸に平行して排水溝が掘られている。

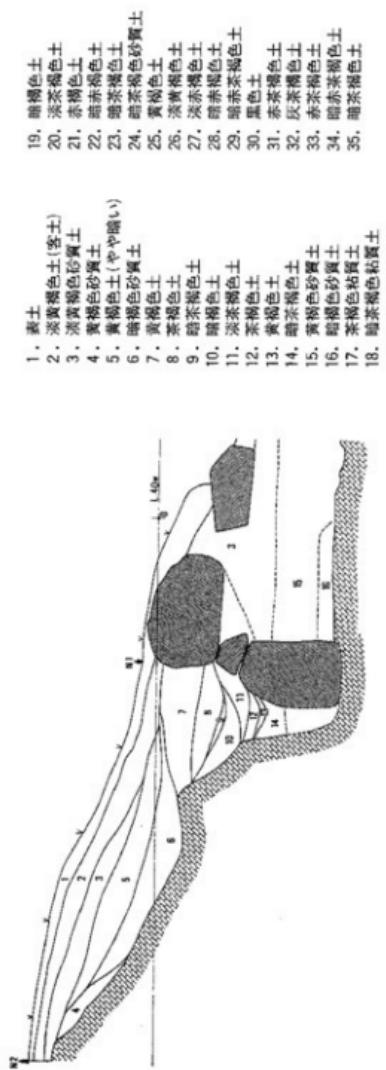


第4図 古墳平面図

排水溝は奥壁から前に2mの所より掘られており、幅42cm、深さ10cmを測る。ほぼ石室主軸線上を床面の傾斜にそって掘り込み、ほぼ一定の幅で入口に向うが、南端は削平されており不明である。溝内には石室内に堆積している暗黄褐色砂質土が堆積していた。



第5図 横穴式石室実測図



第6図 古墳の縦横断面図

## IV 遺物の出土状態

石室内の副葬品は奥壁に接する位置、すなわち天井石の残存する部分のみが擾乱を受けずに検出された。それ以外の場所は後世の擾乱により遺物が持ち去られたものと思われ、僅かに台付平瓶と鉄釘片が認められた。

原位置と考えられる奥部では、西端部に集中して遺物が認められる。これらの遺物は重なりあっており、おそらく追葬に際し整理されたものと思われ、須恵器 8 個体、土師器 1 個体が出土した。この東側にも須恵器の平瓶が 2 個体と、やや南側では杯や高杯が点在していた。

木棺に使用されたと考えられる鉄釘は、完形のものは少なく、その多くは破損していた。出土状態にも、規則的な配置が認められない状態であり、追葬時に移動あるいは欠損したものではなかろうか。

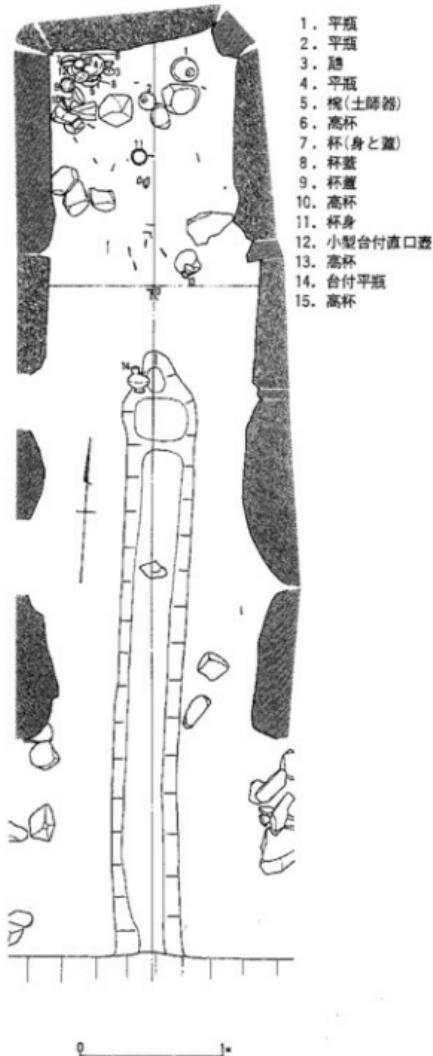
## V 出土遺物

遺物は周溝内で、須恵器の甕あるいは壺と考えられる小破片が出土した以外は、すべて石室内からの出土品である。

### 須恵器 (第 8・9 図)

杯蓋 杯蓋は 3 個体出土し、すべて完形品である。

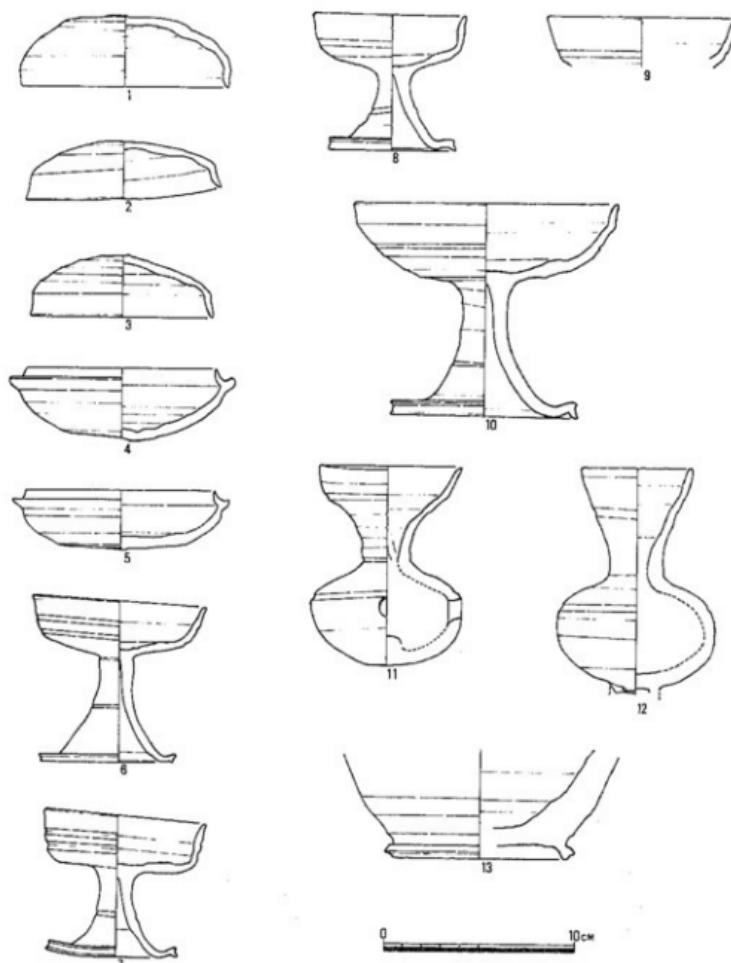
1 は概して丸みをもち天井部と口縁



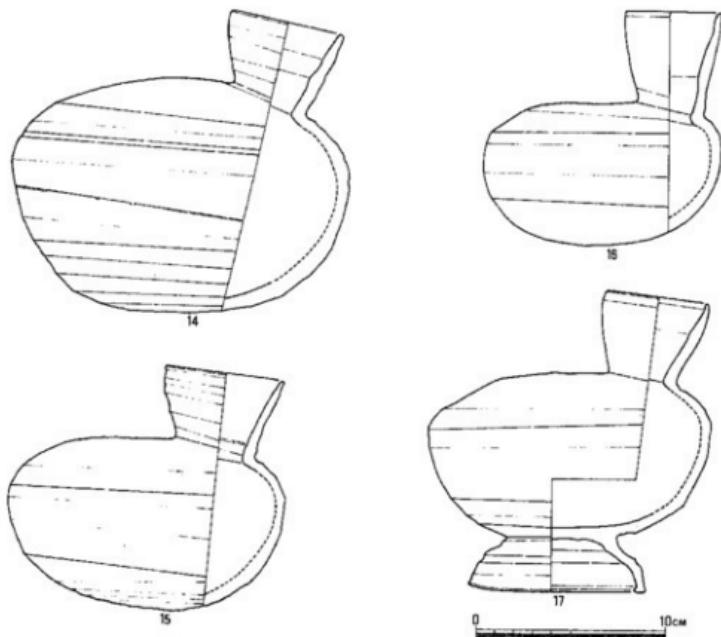
第 7 図 遺物分布図

部との境界が不明瞭となる。口縁部は内湾ぎみになり、端部は外方へつまみ出している。調整は天井部外面がヘラ切り後來調整で、その他は内外面とも横ナデにより仕上げている。

2と3は1に比べ小型化している。口縁部は緩やかに傾斜する天井部からほぼ垂直に屈曲し



第8図 須恵器(1)

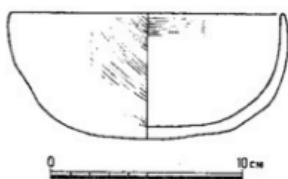


第9図 須恵器(2)

ている。調整は天井外面2/3程度をヘラ削りし、その他の内外面とも横ナデにより仕上げている。

杯身　杯身は2個体出土し、いずれも完形品である。

4、5とも小型化しており、口縁部の立上りも短く内傾が著しい。調整は4の底部外面がヘラ切り後ナデ、5はヘラ切り後未調整である以外は、内外面とも横ナデにより仕上げている。



第10図 土師器

高杯　高杯は5個体出土し、9以外はすべて完形品である。

6は小型の高杯である。脚部はラッパ状に開き、脚端はほぼ水平に外反後下方へつまみ出され、脚端面には強い横ナデによる凹部がめぐる。脚柱部には沈線が一条めぐっている。杯部はほぼ平垣な底部からやや外反ぎみに立上る口縁部がつく。底部と口縁部の境界、そして口縁部

には沈線がめぐる。調整は内外面とも横ナデにより仕上げている。

7も小型の高杯で概して歪みが著しい。6と同じ形態であるが、杯底部から口縁部への立上りはほぼ垂直となり、沈線は太く、調整の横ナデと相俟って凹線状になっている。調整は杯底部分面が仕上げナデとなる以外は横ナデにより仕上げている。

8も小型の高杯で、6, 7と同じ形態である。調整は内外面とも横ナデにより仕上げている。

9も小型の高杯であるが、石室内の擾乱土中から出土したもので、口縁部の一部が認められた。調整は内外面とも横ナデにより仕上げている。

10は大型の高杯である。脚部は細い脚柱から脚端にむかってラッパ状に開き、脚端はほぼ水平に外反後端部を下方へつまみ出している。端面には横ナデによる凹部がめぐる。杯部は底部

表1 須恵器・土師器計測表

番号	遺物分布図の番号	器種	残存	口径	最大径	器高	色調	胎土	焼成	(単位cm)	
										回転	ロクロ回転
1	8	杯蓋	完形	11.0		3.8	暗灰色	1mm前後の砂粒 少し含む	良好	左方向	
2	9	杯蓋?	完形	10.2		3.1	灰白色	2~3mmの砂粒 多く含む	良好	右方向	
3	7	杯蓋?	完形	9.6		3.3	淡灰色	2mm以下の砂粒 含む	良好	右方向	
4	7	杯身	完形	10.0	11.8	3.9	淡灰色	2mm大の砂粒 含む	良好	左方向	
5	11	杯身	完形	9.9	11.4	3.2	暗青灰色	1~3mmの砂粒 多く含む	良好	右方向	
6	15	高杯	完形	9.1		8.9	暗灰色	1mm大の砂粒 含む	良好	右方向	
7	6	高杯	完形	8.4		7.9	暗灰色	1mm大の砂粒 含む	良好	右方向	
8	13	高杯	完形	7.9		7.3	暗灰色	1mm以下の砂粒 含む	良好	右方向	
9		高杯	口縁部破片	9.87			暗灰色	1mm以下の砂粒 含む	良好		
10	10	高杯	完形	13.7		11.4	淡灰色	1~3mmの砂粒 含む	良好	右方向	
11	3	甕	完形	8.0	8.0	10.6	暗青灰色	1mmの砂粒 多く含む	良好	?	
12	12	台付直口甕	舞台部欠損	5.7	8.3	12+ε	淡灰色	1mmの砂粒 少し含む	良好	右方向	
13		長頸壺?	底部破片				暗灰色	3mm大の砂粒 含む 3mm	良好		
14	1	平瓶	完形	5.9	17.6	16.2	淡灰色	2mm大の砂粒 含む	良好	右方向	
15	4	平瓶	完形	6.2	14.5	13.0	淡灰色	2mm以下の砂粒 含む	良好	右方向	
16	2	平瓶	完形	5.5	12.5	12.5	暗灰色	1mmの砂粒 少し含む	良好	右方向	
17	14	台付平瓶	完形	5.2	14.9	16.1	暗灰色	1mm以下の砂粒 含む	良好	右方向	

土師器

	5	楕	完形	14.2		6.7	赤褐色	精製粘土(外面丹塗り)	良好	
--	---	---	----	------	--	-----	-----	-------------	----	--

から丸みをもって口縁部にいたるが、その境界には沈線がめぐる。調整は杯底外面がヘラ削りの他は横ナデにより仕上げられている。

**鶴** 胸部と口縁部径は同じで安定している。口頭部はラッパ状に開くが、頸部と口縁部境界には若干段を有する。調整は底部外面がナデ、その他は横ナデにより仕上げている。

**台付直口壺** 口頭部は外反ぎみに立上り、中位に浅い凹部がめぐる。胸部はやや扁平な球形を呈し、肩部には沈線がめぐる。なお脚台部は欠損している。調整は底部外面がヘラ削り後横ナデを施す以外は横ナデにより仕上げている。

**平瓶** 3個体出土し、すべて完形品である。いずれも漏斗状の口縁部をもち、胴部は上面がやや扁平ではあるが、器体は概して丸みをもっている。14は肩部に一条沈線がめぐるが、その他には認められない。調整はいざれも底部外面をヘラ削りし、その他は横ナデにより仕上げている。

**台付平瓶** 上記の平瓶と同じ器形を呈するが、八の字状の脚台がつくものである。調整は胴底部外面がヘラ削りの他は横ナデにより仕上げている。

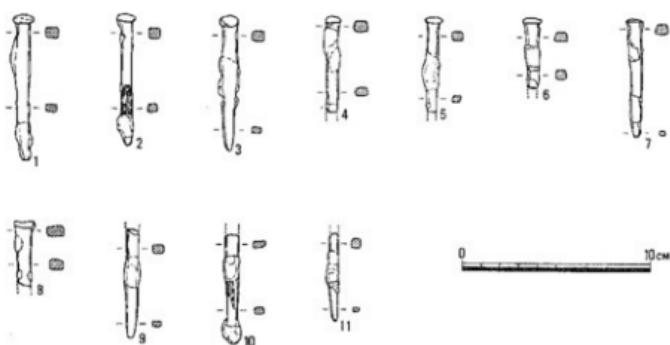
**底部** 長頸壺の底部と考えられる破片で、擾乱土中より出土した。

#### 土師器（第10図）

楕が1個体出土し、完形品である。外面は丹が塗られている。調整は内外面ともハケ調整後ナデによって仕上げている。

#### 鉄釘（第11図）

小破片まで含めると24点出土したが、比較的残存の良い11点を図示した。形状はほぼ同じもので、頭部はJ形に折れている。長さは7cm前後、断面は方形で幅は6mm前後を測る。



第11図 鉄釘

## 第V章 結 語

高津池北古墳は調査の結果、墳丘は径約11.6mの円形を呈し、全長5mの無袖横穴式石室を内部主体とする古墳であることが判明した。石室の規模は一基のみ単独で所在するため比較しえないが、南側の丘陵に所在する皿池古墳群の石室と比較すると、やや小型と言えるかも知れない。

古墳の年代については副葬された須恵器から推定し得るが、盜掘を受けているため厳密さを欠くおそれもあるが、その大略は知り得ると思われる。

須恵器の内、杯について概観すると、いずれも小型化していることが指摘され得る。1の杯蓋はやや大きいもののその他は口径10cm内外であり、しかも杯身をみると、その受部立上りは短かく内傾が著しい。

このような特徴を示す杯は、近くでは本墳の南約6kmに所在する倉敷市玉島の寒田窯址に認められる（註1）。寒田窯址では窯体の断面から少なくとも3回の補修・操業が確認されており、また灰原出土の杯も大型（A類）・小型（B類）・中間的なもの（C類）とに分類されている。このうちB・C類とされたものに本墳出土の杯は類似する。

さて寒田窯址の須恵器が7世紀初頭から前半の年代と推定されていることから、本墳も概ねその時期と考えて問題はない。すると副葬品のうち盜掘されたものもある可能性があるとは言え、その築造年代は一般的な後期古墳築造期である6世紀後半より遅れており、しかも須恵器に年代差が認められないことから短期間の追葬のうち利用されなくなったものと考えられる。

なお副葬された須恵器のうち、台付の平瓶は類例の少ないもので、県内では中央町塚の前古墳（註2）に1点出土しているのみである。

### 註

註1 椎瀬昭彦、伊藤晃、岡本寛久「黒土窯址・寒田窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告31』1979年

註2 平井勝「塚の前古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告44』1981年

## 付載

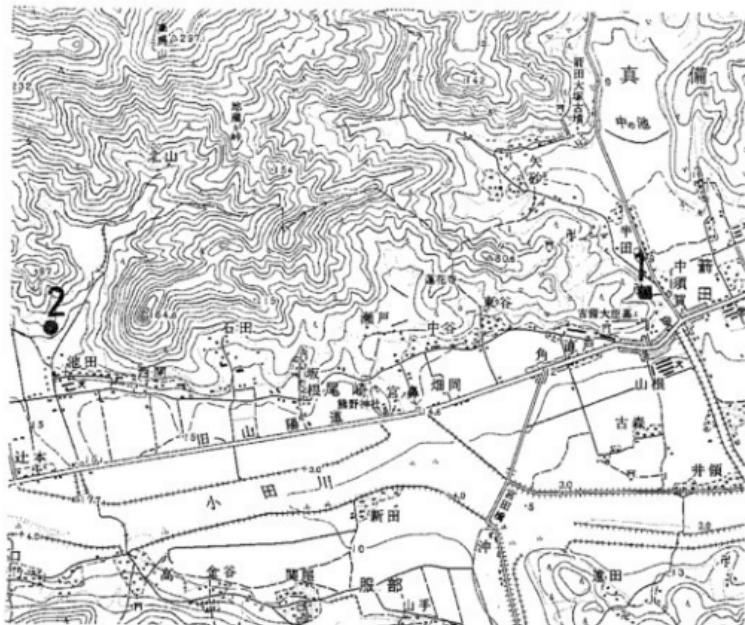
### 真備町出土の遺物

#### I 吉備寺出土の瓦

はじめに

吉備寺は真備町箭田字前崎に所在する。ここから出土した鋸歯文と連珠文で外区を飾る重弁連華文軒丸瓦は「吉備寺式」瓦としてよく知られているところである。

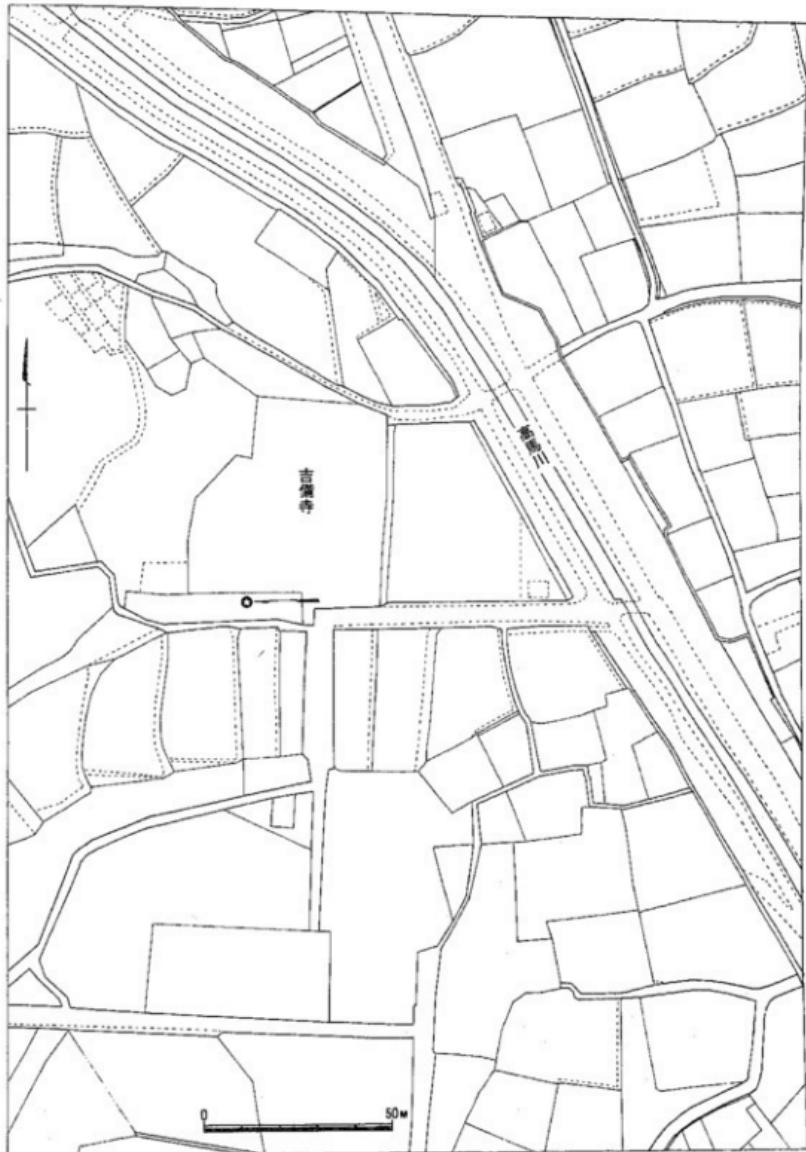
ここで紹介する瓦は昭和56年春に、吉備寺が水道管を埋設する際に出土したものである。出土地点は吉備寺の南側土屏の南の畑である。詳細な出土状況は不明であるが、吉備寺の話によると地表下40cm前後の所から平瓦、丸瓦片とともに軒丸瓦が1点出土したと言うことである。



1. 吉備寺(箭田磨寺)

2. 妹字内山の須恵器出土地点

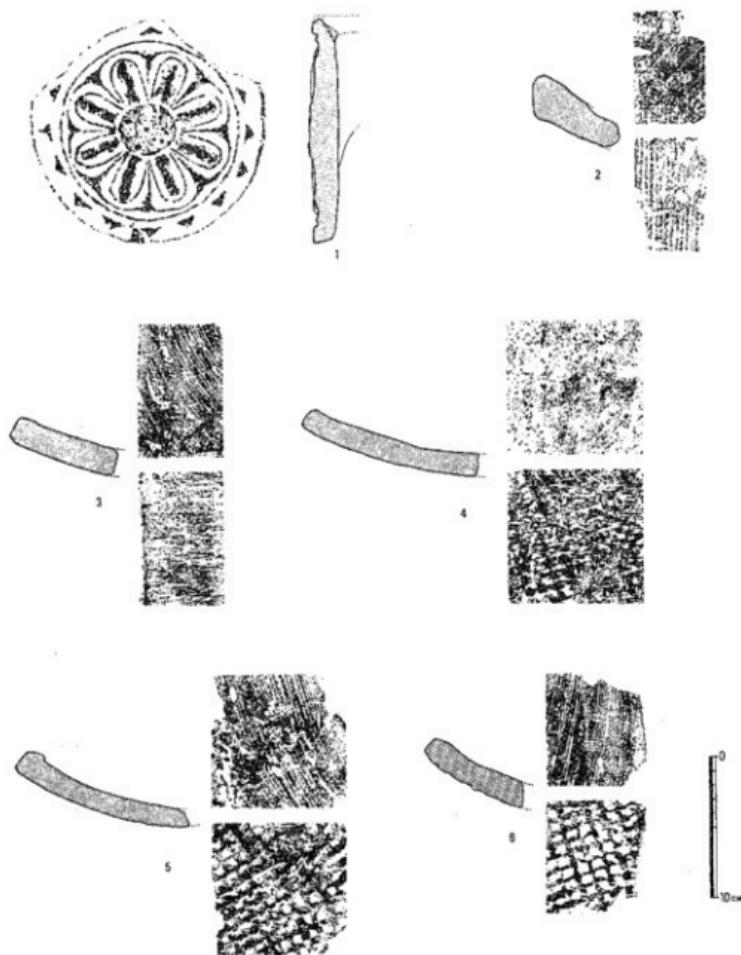
第12図 遺跡の位置 ( $S = \frac{1}{25,000}$ )



第13図 瓦の出土位置

出土遺物（第14図）

出土遺物はすべて瓦で、軒丸瓦の瓦当部1点と平瓦、丸瓦の破片が多数認められた。平瓦と丸瓦については凸面のタタキが異なる破片を図示した。



第14図 古備寺出土の瓦

軒丸瓦(1), 単弁蓮花文軒丸瓦である。外区には外向する凸縫衝文を飾り、その内側には外区と内区を区画する図線がめぐる。内区には8葉の単弁が配され、その間に中房にまで達する楔形の間弁がつく。中房には1+4の蓮子が認められる。なお瓦当下端周縁部に範のキズと考えられる粘土の隆起が認められる。

瓦当の厚さは中房の位置で2cmを測る。瓦当と丸瓦の接合は、瓦当裏面上縁を薄くし、そこに丸瓦を差し込む。その後内側に粘土を貼り付けて補強している。最後はナデによって仕上げている。胎土に1~3mmの砂粘を多く含み、色調は灰白色を呈する。

平瓦(2~6), 2は凹面に布目が、凸面は繩目のタタキ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、色調は淡黄灰色を呈する。

3は凹面に糸切り痕が、凸面はタタキを消した擦痕が認められる。

4は凹面に細かい布目が、凸面は格子目のタタキを一部消している。

5の凹面は布目の上に糸切り痕が認められ、凸面は小さい格子目のタタキが残る。

6も凹面は布目の上に糸切り痕が残り、凸面は小さな格子目のタタキが残る。須恵器で、胎土に砂粒を含む。

## II 妹出土の装飾付須恵器

### はじめに

ここに紹介する須恵器は真備町大字妹字内山445-1から出土したものである。位置するところは小田川に沿って北から南に延びる丘陵の先端部斜面である。

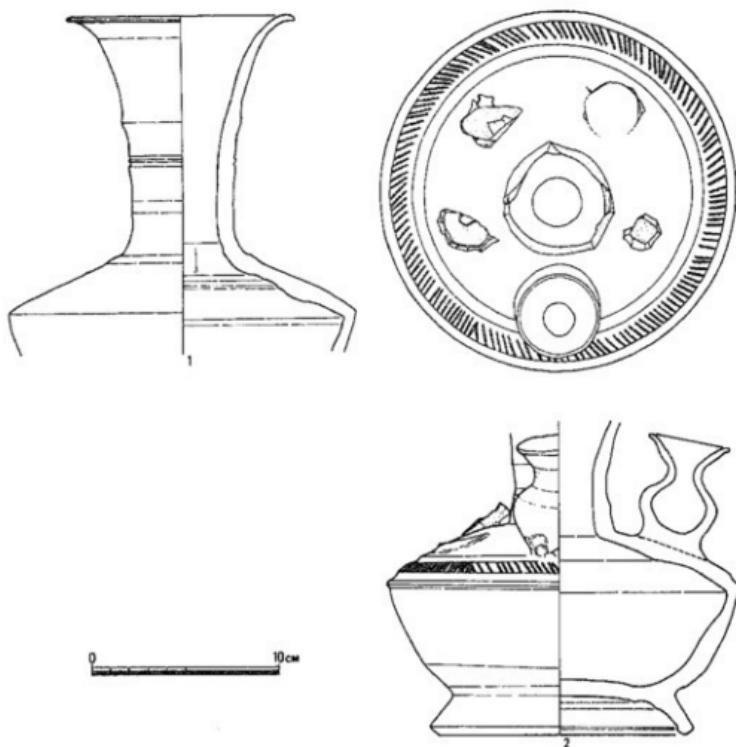
発見の契機は小規模な土取りに係るもので、昭和56年5月10日に発見者が町内在住の町総務課の近藤氏に出土遺物を持ち込んだことによる。氏はただちに現地を踏査したが、他に遺物は認められず、石が削られた崩上に残存していたと言うことであった。遺物は氏から町教育委員会に届出られ、昭和56年9月4日付けで遺物発見届が提出されている。

出土遺物は発見者が近藤氏の所へ持ち込んだ須恵器2点のみであるが、その造構については明らかでない。現地を見る限りでは、墳丘状のものは認められず、僅かに石室とも考えられる石が露呈している。

### 出土遺物(第15図)

長頸壺(1), 脊部下半を欠き、残存高18cm、口径12cm、胴部最大径18.4cmを測る。調部は最大径を有する肩部でくの字状に鋭く屈曲する。頸部は胴部中心からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部近くではゆるやかに外反し、口唇部はやや垂れ下がりぎみに強く外反する。頸部中程には2条の凹線がめぐる。

装飾付長頸壺(2), 頸部上半と装飾4個を欠損する。残存高17.5cm、胴部最大径18.9cm



第15図 妹字内山出土の須恵器

を測る。底部は上げ底氣味となり、直線的に聞く高台が付く。胴部は肩までやや内湾氣味に立ち上がり、最大径を有する肩部で鋭く屈曲する。肩部には2本の凹線に区画された中に、細い櫛状施文具による斜行刺突文がめぐる。肩部中程には装飾が5個認められ、そのうち1個が現存している。現存する装飾の蓋は口径4.4cm、胴部最大径4.1cm、器高5.5cmを測る。他の装飾については貼り付け部が若干残存するのみで、その形は明らかにし得ない。頸部は上半が欠損するが、やや外反ぎみに立ち上がる。

小稿を作成するにあたり、近藤益二氏には諸々御教示を得た。記して謝意を表します。



1. 古墳の遠景 (南西から)



2. 古墳の近景 (南から)

図版 2



1. 調査前の古墳（北から）



2. 調査前の古墳（西から）



1. 調査風景（西から）



2. 調査風景（南西から）

図版 4



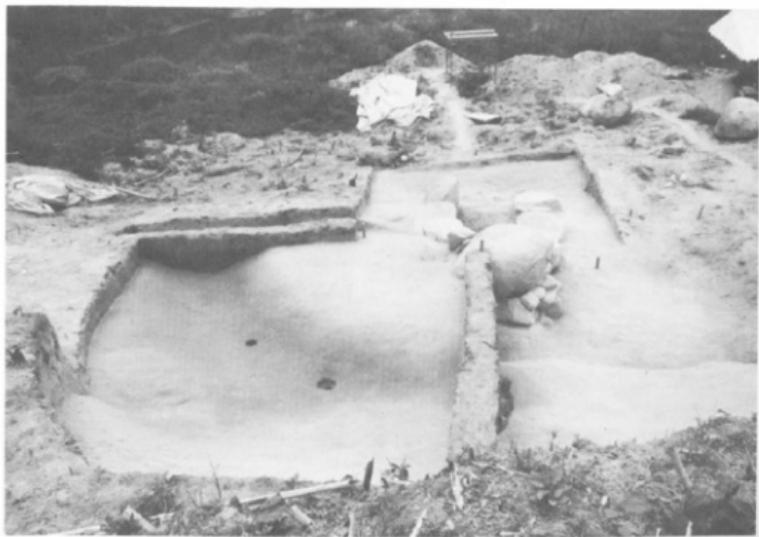
1. 調査風景（南から）



2. 調査風景（南から）



1. 古墳全景（南から）

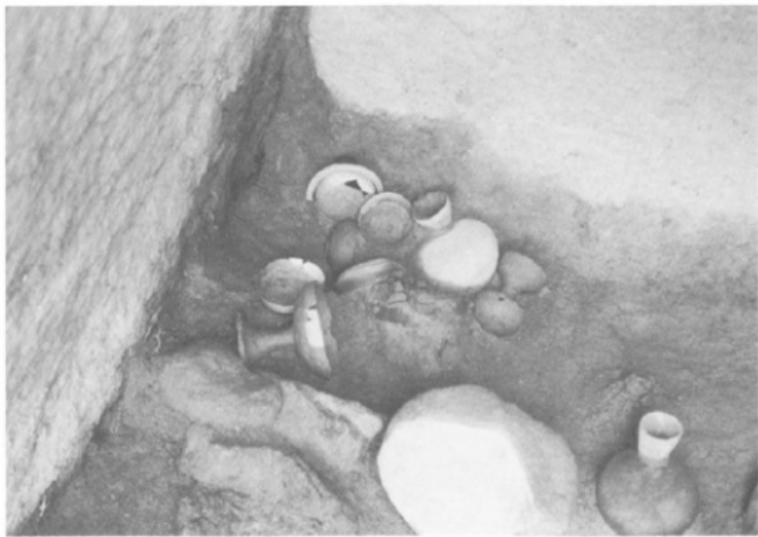


2. 古墳全景（北から）

図版 6



1. 石室内副葬品出土状態（南から）



2. 石室内奥壁北西部の副葬品出土状態（南から）



1. 横穴式石室（南から）



2. 横穴式石室（西から）

図版 8



1. 北西端の石室掘方（西から）



2. 奥壁部石室掘方と土層断面（西から）



1. Wトレンチの石室掘方（西から）



2. Wトレンチ石室掘方の土層断面（南から）

図版10



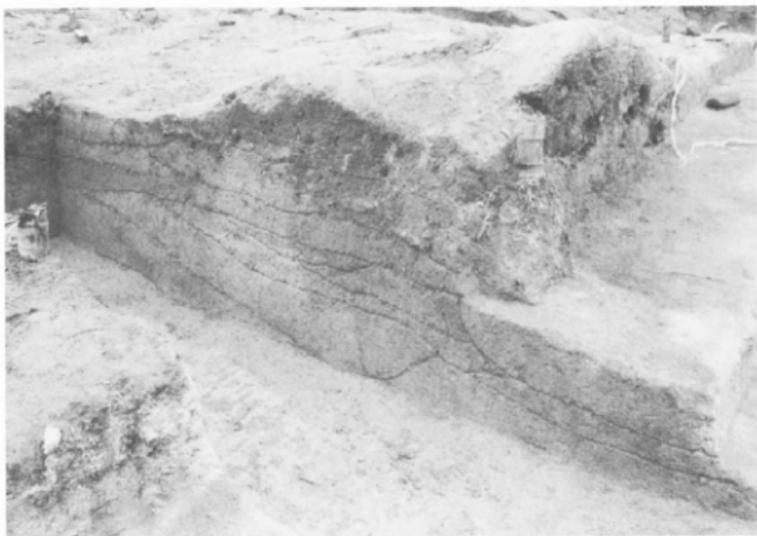
1. E トレンチの石室掘方と土層断面（東南から）



2. E トレンチ石室掘方の土層断面（南から）



1. E.S.トレンチ土層断面（南から）



2. W.S.トレンチ土層断面（南から）

図版12



1. Nトレントレンチ土層断面（西から）



2. 周溝〔東から〕



1. 周溝内のピット（北東から）



2. 石室前面の凹部（北から）

図版14



1. 調査後の古墳全景（南から）



2. 調査後の古墳全景（北から）

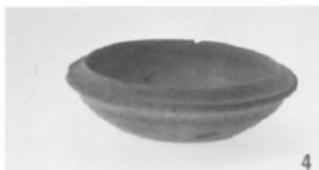
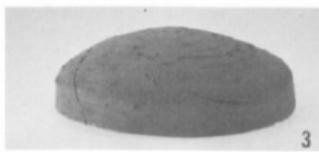
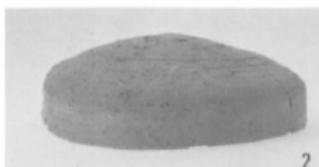


1. 調査後の古墳遠景（南から）

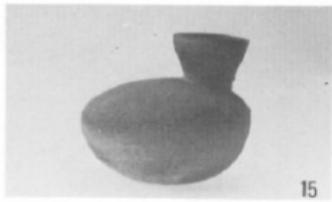
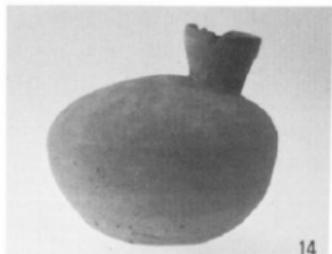


2. 見学会の風景

図版16



須恵器(1)

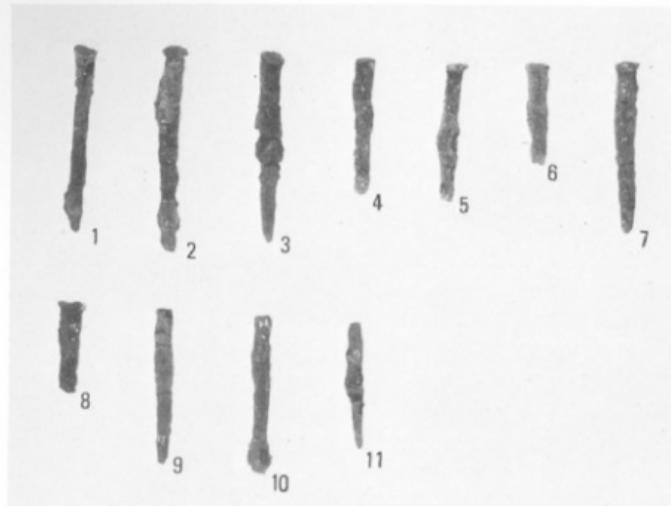


1. 須恵器(2)



2. 土師器

図版18



1. 鉄釘



2. 吉備寺出土の軒丸瓦

## 高津池北古墳

1982年3月31日発行

編集 真備町総合公園内

発行 埋蔵文化財発掘調査委員会

岡山県吉備郡真備町箭田1679

印刷 西尾総合印刷(株)横井支店

岡山市横井上90

L  
四